

# 大学生におけるローマ字入力速度と綴り選択の変化に関する予備的研究

佐田 吉隆\*1

Email: ysada@shudo-u.ac.jp

\*1: 広島修道大学経済科学部

◎Key Words タッチタイピング, 大学生, ローマ字入力, ローマ字教育

## 1. 目的

佐田<sup>(1)</sup>は、大学生がどのようにローマ字入力を行うか、ローマ字入力の速度で二分し、比較を行った。その結果、ローマ字入力は小学校で学ぶ「訓令式」が基礎になっていることがうかがえ、ローマ字入力が速い学生においても、打鍵数の多くなる綴りを選択していたり、動かしにくい指を使った綴りを選択する傾向がみられた。また入力速度の劣る学生においては、拗音に関する綴りの知識が欠落している可能性が高く、ローマ字の理解も不十分であることがうかがわれた。

著者が現在行っている入門的な情報リテラシー教育では、タッチタイピングのホームポジションを教える程度であり、タイピング練習を本格的には行ってはいないが、半期(3ヵ月間)の授業終了後に、学生のローマ字入力速度及び綴り選択がどのように変化したかを考察した。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

情報教育の授業を受講しているA大学のべ129名(重複履修者3名を含む)であり、授業初日(事前調査)及び終日(再調査)に、クラスごとに集団実施した。

調査時期は2017年4月中旬及び7月中旬、9月下旬及び12月下旬であった。

### 2.2 手続き

WebClass Ver10.03c(日本データパシフィック社)のアンケート集計機能を用いた。画面上にフォームを設置し課題文を一文ずつ提示し、その文章をローマ字でどう表現するかをアルファベット(半角入力)で入力してもらい、累積入力時間(熟達度の指標とした)を記録する方法をとった。なお先行研究<sup>(1)</sup>と比較検討の観点から、拗音や促音等の綴りも含めて確認できる、長澤<sup>(1)</sup>の4つの課題文を使用し、日本語入力をオフ(半角英数)にして、ローマ字入力するつもりで「なるべく速く、正確に」タイピングするよう教示した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 累積回答時間

累積回答時間の平均は、事前調査 198.8 秒から再調査 161.6 秒と有意に減少した( $t(128)=8.955, p<.01$ )。

### 3.2 単音に関するローマ字入力

単音に関しては、先行研究<sup>(1)</sup>との比較のため、「ふ」「じ」「づ」の3音について確認した。「ふ」「じ」については、訓令式の綴りを採用しているか、タッチタイピングの際

に合理的なへボン式を採用しているかにも着目した。また他に、訓令式とへボン式の主な違いとして挙げられることの多い、「ち」と「つ」についても確認した。

#### ● 「ふ」の結果

入力効率の良いへボン式の「fu」より、訓令式の「hu」を選択した者が多かった。これは、先行研究<sup>(1)</sup>を支持する結果であった。綴り選択の変化については、McNemar検定の結果、有意差はみられなかった。

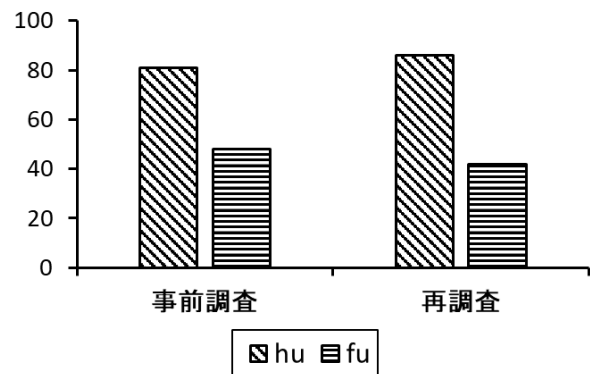


図1 「ふ」のローマ字選択人数

#### ● 「じ」の結果

「じ」は「ji」でも「zi」でも表現できるが、タッチタイピングで入力すると、左手小指でタイプする「z」を使うよりも、右手人差し指ホームポジションの「j」と「i」を組み合わせる方が合理的である。いずれの調査でも、入力しやすいへボン式の「ji」と、訓令式の「zi」を選択した者がほぼ同数であった。McNemar検定の結果、選択傾向に違いはみられなかった。

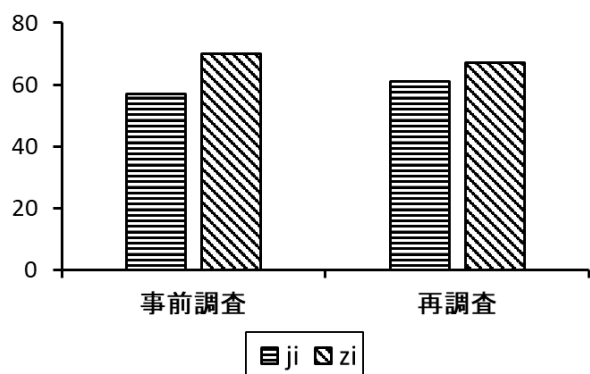


図2 「じ」のローマ字入力選択人数

#### ● 「づ」の結果

「づ」については、綴りそのものを知っているか否かが問題となる。すなわち、「づ」は、訓令式では「zu」と表記するが、ローマ字入力特有の綴りとして「du」が用意されている。再調査で、訓令式の「zu」(誤り)を選択し

た者が、41名から32名に減少した。しかしながら McNemar 検定の結果、有意差は認められなかった。

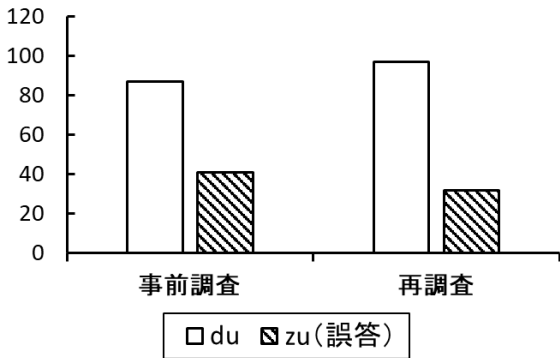


図3 「づ」のローマ字入力選択人数

● 「ち」の結果

「ち」という音を表現するにあたっては、「ti」と「chi」のいずれでも入力できるが、「ti」の打鍵数が少なく、楽に打鍵でき合理的である。いずれの調査でも、打鍵数の少なくて済む訓令式の「ti」が多く、少数ではあるがへボン式の「chi」も認められた。綴り選択の変化については、McNemar 検定の結果、有意差はみられなかった。

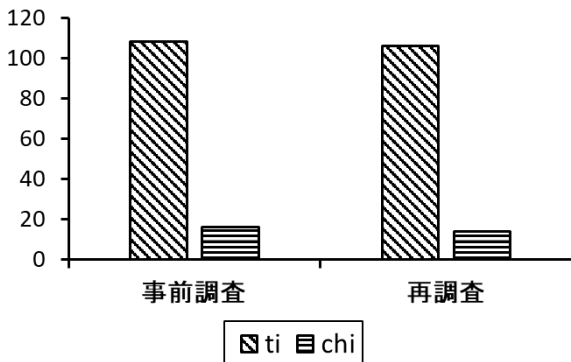


図4 「ち」のローマ字入力選択人数

なお、「つ」についても調査したが、事前調査では129名中121名、再調査では120名が「tu」と入力した。

3.3 拗音に関するローマ字入力

拗音に関しては、先行研究<sup>1)</sup>との比較のため、「じゃ」「ふぁ」「てい」について確認した。このうち、「てい」は小学校の国語科では触れない綴りである。

また「l」と「x」は、キーボード操作独自の表記として、拗音1文字を入力するために使用する。

● 「じゃ」の結果

「じゃ」という音を表現するにあたっては、「ja」「jya」

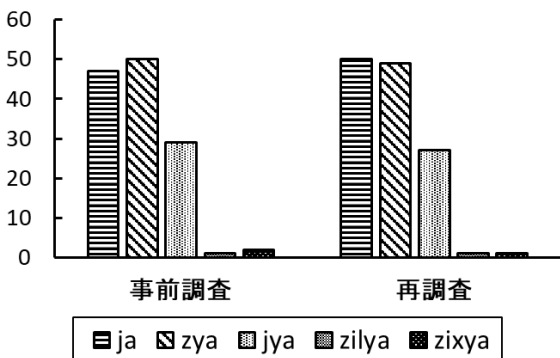


図5 「じゃ」のローマ字入力選択人数

「zya」「zilya」「zixya」のいずれでも入力できるが、「ja」の打鍵数が少ないばかりか、タッチタイピングにおけるホームポジションを使える「ja」という綴りの方が楽に打鍵でき合理的である。

いずれの調査とも、へボン式の「ja」を採用する者と同じくらい「zya」が多く、次いで「jya」であった。あるいは「zilya」、「zixya」で表現するケースもみられた。McNemar-Bowker 検定の結果、有意差は認められなかった。

● 「ふぁ」の結果

「ふぁ」は「fa」で入力できるが、「f」を使う綴りはへボン式となるため、訓令式の綴りが頭に入っている学生は「hula」「huxa」などを選択している可能性がある。

また「f」も、ホームポジションに配置されているため、タッチタイピングにおいては「h」よりも優先的に利用したいキーである。誤答数が13名から7名に減少したが、McNemar-Bowker 検定の結果、有意差は認められなかった。

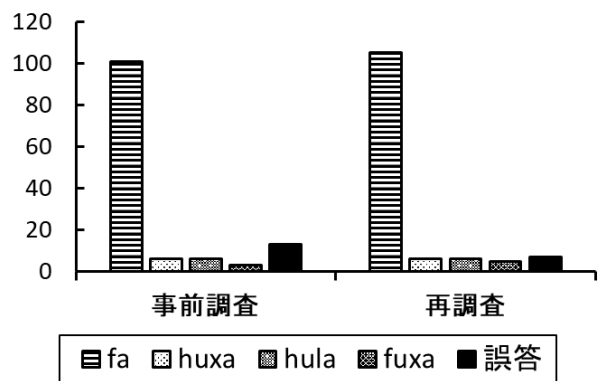


図6 「ふぁ」のローマ字入力選択人数

● 「てい」の結果

「てい」は、ローマ字入力では「thi」で入力できるが、「du」同様、特殊な綴りであることから、綴りを知っているか否かが問題となる。「thi」は、小・中学校で触れない綴りである。「thi」の綴りよりも、母音の手前に「l」や「x」を付け小文字にすることで補っている学生が多く、特に誤答が多い点は、先行研究<sup>1)</sup>とも共通する特徴であった。誤答数が43名から29名に減少しており、McNemar-Bowker 検定の結果、有意差が認められた ( $p < .05$ )。

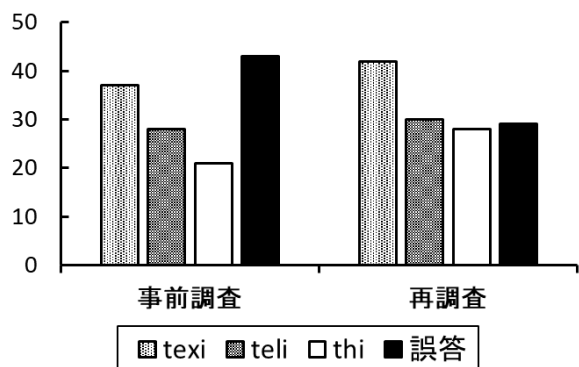


図7 「てい」のローマ字入力選択人数

参考文献

(1) 佐田吉隆：“大学生におけるローマ字入力速度と綴り選択に関する研究：ローマ字教育との関連から”，コンピュータ&エデュケーション，43，pp.61-66 (2017).  
 (2) 長澤直子：“ローマ字教育とローマ字入力について考える二者の間の接点に注目して”，情報化社会・メディア研究，8，pp.21-32 (2011).